海外論文＆レポート

イタリア社会的経済への旅　番外編

具体的な要求に応えながら、社会参加を組織するＡＦＲの試み

～農村アイデンティティを核に、社会教育を担うアソシエーション～

田中夏子（長野大学）

1．はじめに

本稿では、農村部で社会教育的な機能を担うアソシエーションについて報告を試みたい。イタリアのアソチアチィオニズムや社会的協同組合が、地域の「生きにくさ」(disagio) に呼応して広がってきたことは、昨年度本誌にて論を重ねてきたとおりである。

「生きにくさ」は、経済的困窮、失業、社会的排除、孤立、尊厳の喪失、コンフリクト･･･と様々な形を取って現れる。通常、都市部の特徴とされるこれらの「生きにくさ」は、しかし農村部においても皆無というわけではない。やや異なる形ではあれ、確実に存在する農村部の「生きにくさ」に、地域の教育機関(高等専門学校や大学)と協同しつつ応えているアソシエーション、ＡＦＲ(Associazione Famiglia Rurale - 農村家族協会)があると聞いた。

AFRはイタリア独自のものではない。もともとはフランスに発生した、農家の師弟を対象とした教育運動だった。それがイタリアに波及し、さらにイタリアから南米に出ていった移民たちの間にも広がっていったという。北東部イタリアを中心にイタリア全土はむろん、南米など国境を越えて関連組織を持ち、現在では途上国での教育援助NGOとしての活動も活発だ。

本稿でその全容に触れることは、筆者の能力に余るので、課題を限定し、農村の変貌に連れ添いながら、対応すべき課題やそのアプローチ方法を柔軟に切り替えてきた経過と、農村に関わる教育機関に求めらる資質に着目をしながら議論を進めていきたい。

2．「農業・農村の維持・保 全 」を核とした運動の積み重ね

ヴェネツィアから北に１００キロ余、列車で約一時間走ったところにある農村地帯、ウンベルト・コッレ(Umberto Colle)を訪ねた。ヴェネト州の中央部に位置し北はオーストリア、東はユーゴに接する国境周辺の地域。平野部がとぎれたところにはドロミテ山脈が迫る。

荒涼として水の乏しい南イタリアの風景を見慣れた者の目には、広大でなだらかな緑地の続く北の風景に、一体どんな「生きにくさ」が潜在するのか、想像するのが容易ではない。特にのこの一帯、ヴェネト州トレヴィゾ周辺は、イタリア北東部の「経済的躍進」の心臓部として、80 年代から 90 年代、中小企業論や地域開発論の研究者たちの、国際的な注目を集めた地域である。農業・農村の維持・保全と、小規模ながらイノヴェイティヴな企業の集積との、バランスのとれた組み合わせによって、内発的発展の事例ともされてきた。州別の「生活の質」調査などでは常にトップ五都市に入る。

しかし、こうした地域においても、農業・農村

の置かれた立場は決して楽観できるものではない。

駅に迎えに出てくれたヴォルパートさんは、車を発進させるなりすぐにこの一帯の地域の概要をレクチャーしてくれた。AFRの活動拠点となっている町、ウンベルト・コッレは、その名に違わず、なだらかな丘陵の上に位置する人口35,000人の町。ヴォルパートさんによれば「ヒューマンスケール」(scala duomo)だ。小さいけれど、農業、商業のみならず、文化活動においても活気のある町。たとえばこの町にはアソシエーションが２５団体、存在する。むろん活動目的も稼働状況も様々だが、実に住民1,400人あたりに一つの割合でアソシエーションが存在することになる。こうした活動が最も盛んなトレントと比較しても遜色ない数値だ(トレントは1,050人に一つ。反面、南部サルデーニャ州は、13,100人に一つ)*。

ヴォルパートさんは、この町の国立農業専門学校で農業技術の教員をした後、副市長を１０年務め、その後1980年から1995年まで、16年間市長の任に就いたという経歴の持ち主。まだ60代半ばだが、5年前、市長を退いてからAFRの事務局長となって、現在は土日も無く、朝から晩までアソシエーションのために奔走する毎日だ。この地域のAFRの活動の特徴は、ヴォルパートさんの教員歴や行政畑での経験を反映している部分も多い。

ところでイタリアでは1980年代以降、町の中心部に集中する歴史的街区の維持・保全とともに、農村維持のための都市づくりが行われてきた。郊外の、無秩序な開発を規制するために、居住地域、工場団地、そして農業用地域の区分けが徹底されたのである(Piani Regolatori Generali　都市総合調整計画)。ヴォルパートさんの市長時代の主要な課題が、この都市計画の遂行であったという。百聞は一見に如かずとばかり高台に登ってみると、手前に歴史的街区、周りに住宅地が並び、それを取り囲む農地にはいっさいよけいな構造物がない。「農業のある生活を守る」という課題が都市計画にも市民活動にも反映されている･･･ヴォルパートさんは、AFRという個別の団体について説明する前に、まずそのことを強調した。

今でこそ北東部イタリアは「豊かな地域」として脚光を浴びているものの、1960年代にさかのぼれば、この地域は移民輩出の地であった。AFRの活動が国際的な広がりを持っているのも南米を中心に各国に渡った移民たちとのつながりがあるためである。60年代半ば以降、故郷から異国に出奔をせずとも食べていかれるようにと工場誘致に力を入れた結果、農業と工場の雇用労働との兼業でなんとか暮らしていくことができる状況となった。親は農業を営み、子供たちは地元の製造業に勤めに出たり、自分で企業を興したりして、移民輩出はようやく過去のこととなった。ちなみに近くにはベネトン発祥の地がある。ベネトンに代表されるように、今やこの地域が、家族経営を中心としたイノヴェイティヴな小規模企業の集積地として関心を集めていることは先に記した。

すなわち、この地域の社会的・経済的特徴を挙げるなら、短期間の急成長ということになろう。その中で、農業を維持・保全するとなれば、かなり意識的なまた系統的な取り組みが必要であったろう。本報告では、地域の農業政策の詳細に触れる余力はないが、少なくとも、ヴォルパートさん個人の生き方を見るだけでも、学校教育、行政、市民活動、社会教育と、アプローチの方法は様々であれ、農を核とした社会基盤づくりに力を尽くしてきたことがうかがえる。

3. AFRとはどのような団体か

(1)閉鎖の養蚕試験場に事務局を構え

町を一巡りしながら、ヴォルパートさんは猛烈な早口で以上のような地域史を説明してくれた。ちょうど話が一段落した頃、ＡＦＲの事務局に到着。建物はかつての養蚕試験場、今は廃屋となっている。二階建ての事務所の一階には、日本でいう公民館的な機能（集会所、教室、調理実習室など）がそろっているが、二階にのぼっていくと蚕繭が無造作に袋詰めされて散乱。見渡すと、机の上の１９８０年のカレンダーに目がとまった。この年に試験場が閉鎖になったという。かつて農業高専で教鞭をとっていたヴォルパートさんは、いとおしそうに繭玉を手に取りながら、この産業遺産の放置を嘆いた。ＡＦＲの仕事が落ち着いたら、ここを蚕糸博物館にするのだという。

AFR 事務所の前で
事務局長のヴォルパートさん
建物はかって養蚕試験場だったものを改装した。

(2)AFR 当初の目的

まずはAFＲの歴史的な経過から触れたい。設立当初（1968年）の目的は、農家の師弟に学びの場を保障することにあった。この小さな町には先述のように国立農業高等専門学校があるが、学校があるだけでは学びの場の保障にはならない。遠方から通わねばならない子には寄宿舎を提供する必要があるし、何より、農繁期に子供を手放したくない親たちが、自ら教育の必要性を認めない限り、子供たちは学びの場を得ない。そのためには親たちが学校運営に参加することが最も有効だ。こうした考えのもと、親や教員有志が集ってアソシエーションを結成した。子供たちが学校や農業試験場で学んだことを、家業に応用していく、といった学校から家庭への技術伝播の効果も生まれた。

いわゆるＰＴＡと異なるのは、やがてそれが学校組織から独立した団体となり、学校教育の支援と同時に農村社会教育の担い手として独自の機能を発展させていった点である。

AFRのイタリア国内の活動を見ると、現在では後者が中心的な活動となっており、学校教育支援については、発展途上国に舞台をシフトさせている。

(3)歴史の転換点

1970年代中頃までは、工場誘致と農業維持といった地域産業政策のもと、地元の農業学校や工業学校出身者たちが地元で学んだこととを活かして、この町で職を見つけることが可能だった。しかし現在では大学進学率もあがり、工学部を出てエンジニアをめざすような傾向が強まってくると、都市部へ、よりいい条件の仕事を求めて若者たちが流出するようになっ

ていく。

雇用労働の状況だけでなく、農業の条件も変わった。農工両立による兼業経営は退き、大型専業農家と農業を手放す元農家との二極分解が進む。家族の中でも、地域の中でも、農業・農村アイデンティティは希薄となっていった。

農業者およびその家族を構成員としていたＡＦＲも、上記のような社会変動の中で、組織のアイデンティティ、組織のあり方、活動内容の変更を迫られる。まず、組織構成員については、「農業に携わっていてもいなくとも、「農村」という価値と、そこに住む者どうしという連帯は大事にしよう」という発想のもと、様々な職業、立場の人々に門戸を開いた。また、各地の「農村」との交流、とりわけ開発途上国の「農村」に対する教育支援を活動の柱の一つとしている。

(4)プロセスの重視に特徴

さて、これまでの経過を駆け足で記してきたが、AFRの現在の活動に目をむけよう。

現在の主要な活動は三つの分野にわたる。第一に社会参加への働きかけ。最初は高齢者の社会参加を掲げていたが、参加の途が閉ざされがちなのは、高齢者だけでなく若年層も同様の問題を抱えているとして、多世代交流事業などを企画。また、他地域における「農村の価値」をめぐる交流事業(彼らはこの事業を、消費的・浪費的な観光と対置させて「社会的観光」(turismo sociale)「責任ある観光」(turismo responsabile)と呼んでいる)も活発だ。

第二は、生涯学習の機会提供。現在、夜間学校で12のコースを開催している。伝統的郷土的な技術(ワイン文化、刺繍芸術、ヴェネト地方の美術と文学、郷土料理など)、先端技術(インターネット)、人との関係づくり(親学級)などで、１コース20人前後。30時間のコースに対して、受講者は一人20万リラ(約1万1千円)を負担する。自治体との共催なので講師代一部補助はあるが、原則として自分たちで企画し、経費も自分たちで捻出する。

活動の第三は、地域から要求のあったテーマでのセミナーやシンポジウムの開催。たとえば2000年には「不平等と闘う：協同による連帯とは」として第三世界への支援や負債帳消しをめぐる議論が、また1998年には、設立30年ということもあって、「自らのルーツの再発見と現代的な課題に対してAFRは何をなすべきか」といった議論が展開されている。

以上のような事業遂行のために資金調達はすべて自分たちで捻出。ちなみに2000年度の年間事業規模は、10億3000万リラ（日本円で6000万）。剰余は1600万リラ（90万円)。国や自治体からの補助金の導入はいっさい無い。

ところで、これらはいずれも生涯学習としては特段目新しい試みではない。ヴォルパートさんが強調したのは、むしろ、活動のプロセスにおける参加の問題である。たとえばシンポジウムの企画は、AFRの会員のみならず、員外の地元住民の参加も得て、下から積み上げていく。こうした実行委員会形式は、今でこそ普及した方法であるが、AFRの場合、そもそも親たちが学校運営に積極的に関わり、手弁当でその運営を支えてきたことに端を発している。「参加」の手法は、外から導入した組織マネジメントではなく、すでに内側に備えていた資質であるという。

自分たちで企画しても、聞きっぱなしの集会では実にならない。そこで集会やシンポの後は、必ずグループワークを設定する。このグループワークでファシリテーターの役割を勤める

のが、地元大学で教育学や社会福祉を専攻する学生たちだ。パドヴァ大学やトリエステ大学などとの恒常的な協力関係ができている。

参加重視の仕組みはこの他にもあらゆるところにセットされている。AFRの申し込み用紙には「あなたが特に協力したいと思う分野は？」として、高齢者の社会参加、学習活動、途上国の教育支援などが列挙されている。入会時に、サブグループに所属する、というやり方も今ではめずらしくはないが、あらゆる機会を捉えて「参加」の契機を張り巡らしていることは、AFRの特徴であろう。170人という少ない会員、「農村」という今となってはひとまとまりと見なすのが難しいアイデンティティにもかかわらず、密度の濃い活動を重ねてきた背景には、この「参加」(coinvolgimento, responsabilizzazione)への働きかけが存在するといえよう。

(5)若い世代へのアプローチ

AFRの年齢構成をたずねると、ヴォルパートさんは「待ってました」とばかり、現在の会長と次期会長を訪ねようという。世代交代の象徴だから･･･というのがその理由のようだ。私は、農村の高齢者、若年層の流出、学校教育から社会教育へのシフト･･･といった話の流れから察して、若年層の参加は少ないのでないか、という予断を持っていた。ところが、比率からいえば、会員の三分の一弱、50名が25歳～35歳であるという。いったいこうした世代がどうしてAFRとの接点を見いだせるのか、不思議な思いだった。

ヴォルパートさんは再び車中で、私の疑問に応えた。「親が60年代～70年代、AFRに関わったり･･･というケースもあるが、そうでない層も多い。AFR主催の集会に顔を出したり、企画の実行委員会に加わったりしながら共感してくれた若手も多い」。

まず現会長のモンテゼッリさん、74歳の農場に赴いた。牛舎、豚舎、鶏舎があり、ワイン用のブドウ畑、アスパラのハウス、ラディッシュ畑が広がり･･･と、典型的な複合経営農家だ。それでも年々経営規模の縮小を迫られ、特に畜産が苦しいという。子供たちは独立して自分の農場を営んでいる。これだけ多角経営の農場を家族労働だけで切り盛りしながら、さらにアソシエーションの長をつとめ、農村・農業の文化とアイデンティティーの開拓に力を注いできた、その公共的精神の源とは何なのだろうか。

そんなことを思いながら、モンテゼッリさんの農園をあわただしく後にし、今度は次期会長、トッフォリさん、35歳の勤めるワイナリーにむかう。この一帯は、イタリアの中でも有数のワイン産地。協同組合産(Cantina sociali)のテーブル

AFRの会長を勤めてきたモンテゼッリ夫妻とヴォルパートさん

ワインと競合しないよう、トッフォリさんのワイナリーでは高級ワインを手がける。トッフォリさんはここの技術部長。15年前、AFRの主催する集会に顔を出したのがきっかけで、今では若手の中心メンバー。モーツァルトの歌劇に登場するワインの話をしていたかと思うと、環境問題をテーマとしたシンポジウムの構想を語る･･･短い時間だったが、自らの仕事に対する愛着と社会的な問題関心の広がりとが交錯しながら会話が進んでいった。

若手の参画は、トップの部分だけではない。理事会構成をみても、15名の理事のうち、35歳以下が９名を占める。

(6)なぜ異文化との交流が必要なのか―社会的観光の意味

さて、今回の訪問には一つの前提があった。日本の農村の中で、AFRが重視する他地域(農村)との交流事業(彼らはこの事業を、消費的・浪費的な観光と対置させて「社会的観光」(turismo sociale)「責任ある観光」(turismo responsabile)と呼んでいる)に、興味を持ってもらえるところはないか、その可能性を探るという前提である。AFRの活動は多岐に渡るが、すべては「農村という価値」をどう守り、また新たに開拓するか、そこで暮らす人々が自らの生き方、暮らし方、働き方をどう豊かなものにするかに集約される。

単に文化交流をするのであれば、何もAFRの企画による必要はない。「農村という価値」が別の地ではどのように維持・開拓されているのか、それを担うのはどういう人々なのか、を示唆するような交流事業にこだわって、「社会的観光」を重ねていきたいという。

4. 最後に

本稿では、ウンベルト・コッレの小さなアソシエーションの動きをたどってきた。自分たちの目の前に広がる「農村の価値」の発見、豊かな老いが可能となるような地域づくりなどの課題と、世界規模で環境や農村の破壊を危惧する視点･･･ミクロとマクロの発想が混在する、ダイナミズムに富んだアソシエーションである。

いわゆる歴史的街区の町並み保存はいうまでもないが、農村独特の造りを持った家についても自治体が買い取り、内装だけ改修して次世代に引き継ぐ。広い家を必要としなくなった高齢の人々は、近くの集合住宅に移り住む。その集合住宅には地域の集会センターと図書館を併設し、人々の足がむくような社会環境としてある。家を手放すことには一抹の抵抗感もあるが、自分が慣れ親しんだ「鐘の音」を聞きながら、旧来の人間関係を維持しつつ、新しい目標や交流ともふんだんに接点がある。AFRはそうした農村づくりの一環に位置付いている。

３０年という歴史が地域への根付きを着実にしている部分はむろん大きいが、若手のイニシアティヴが育っているところを見ると、歴史に依存しない柔軟な発想や思い切った組織見直しに挑む文化を備えている。

本稿が、イタリアの小さな村と、「農村の価値」を共有し、交流事業につなげようという日本の農村関係者の目にとまることを願いつつ、筆を置きたい。

*こうしたアソシエーションの厚みというのは、イタリア社会の大きな特徴とされ、住民の参加と自治の象徴として、しばしば参画社会の指標とも考えられてきた。R.D.Putnam, Making democracy work: Civic Trditions in Moders Italy, Princeton Uniersity Press, 1993, p92 .

Note